

嵐

島崎藤村

青空文庫

子供らは古い時計のかかった茶の間に集まって、そこにある柱のそばへ各自の背丈せたけを比べに行つた。次郎の背せいの高くなつたのにも驚く。家じゆうで、いちばん高い、あの子の頭はもう一寸四分ぶぐらいで鴨居かもいにまで届きそうに見える。毎年の暮れに、郷里のほうから年取りに上京して、その時だけ私たちと一緒になる太郎よりも、次郎のほうが背はずっと高くなつた。

茶の間の柱のそばは狭い廊下づたいに、玄関や台所への通い口になっていて、そこへ身長を計りに行くものは一人ひとりずつその柱を背にして立たせられた。そんなに背延びしてはズるいと言ひ出すものがありもつと頭を平らにしてなどと言ふものがあつて、家じゆうのものがみんなで大騒ぎしながら、だれが何分延びたというしるしを鉛筆で柱の上に記しるしつけて置いた。だれの戯れから始まつたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ一つには頭文字かしらもじだけをローマ字であらわして置くような、そんないたずらもしてある。「だれだい、この線は。」

と聞いてみると、末子すえこのがあり、下女げじよのお徳とくがある。いつぞや遠く満州の果てから家をあげて帰国した親戚しんせきの女の子の背丈せたけまでもそこに残っている。私の娘も大きくなつた。

末子の背は太郎と二寸ほどしか違わない。その末子がもはや九文^{もん}の足袋^{たび}をはいた。

四人ある私の子供の中で、身長^{身長}の發育にかけては三郎がいちばんおくれた。ひところの三郎は妹の末子よりも低かった。日ごろ、次郎びいきの下女は、何かにつけて「次郎ちゃん、次郎ちゃん」で、そんな背の低いことでも三郎をからかうと、そのたびに三郎はくやしがつて、

「悲觀しちまうなあ——背はもうあきらめた。」

と、よく嘆息した。その三郎がめきめきと延びて来た時は、いつのまにか妹を追い越してしまつたばかりでなく、兄の太郎よりも高くなつた。三郎はうれしきのあまり、手を振つて茶の間の柱のそばを歩き回つたくらいだ。そういう私が同じ場所に行つて立つて見ると、ほとんど太郎と同じほどの高さだ。私は春先^{たけのこ}の筍^{たけのこ}のような勢いでずんずん成長して来た次郎や、三郎や、それから末子をよく見て、時にはこれが自分の子供かと心に驚くことさえもある。

私たち親子のものは、遠からず今の住居^{すまい}を見捨てようとしてゐる時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めいめい一部屋^{ひとへや}ずつを要求するほど一人前^{いちにんまえ}に近い心持ちを抱^{いだ}くようになつてみると、何かにつけて今の住居^{すまい}は狭苦^{せまぐる}しかった。私は二階の二部屋を次郎と

三郎にあてがい（この兄弟きょうだいは二人ともある洋画研究所の研究生であつたから、）末子は階下にある茶の間の片すみで我慢させ、自分は玄關側わきの四畳半にこもつて、そこを書斎とも応接間とも寢部屋ねべやともしてきた。今一部屋もあつたらと、私たちは言い暮らしてきた。それに、二階は明るいようでも西日が強く照りつけて、夏なぞは耐えがたい。南と北とを小高い石垣いしがきにふさがれた位置にある今の住居すまいでは湿気の多い窪地くぼちにでも住んでいるようで、雨でも来る日には茶の間の障子しょうじはことに暗かった。

「この家には飽きちやつた。」

と言ひ出すのは三郎だ。

「とうさん、僕と三ちゃん二人で行つてさがして来るよ。いい家があつたら、とうさんは見においで。」

次郎は次郎でこんなふう引き受け顔に言つて、画作の暇さえあれば一人ひとりでも借家をさがしに出かけた。

今さらのように、私は住み慣れた家の周囲を見回した。ここはいちばん近いポストへちよつとはがきを入れに行くにも二町ちやうはある。煙草屋たばこやへ二町、湯屋へ三町、行きつけの床屋とこやへも五六町はあつて、どこへ用達ようたしに出かけるにも坂を上のぼつたり下くだつたりしなければなら

ない。慣れてみれば、よくそれでも不便とも思わずに暮らして来たようなものだ。離れて行こうとするに惜しいほどの周囲でもなかった。

実に些細なことから、私は今の家を住み憂く思うようになったのであるが、その底には、何かしら自分でも動かずにいられない心の要求に迫られていた。七年住んでみればたくさんだ。そんな気持ちから、とかく心も落ちつかなかった。

ある日も私は次郎と連れだつて、麻布あさぶ筈こうがいちよう町から高樹町たかぎちようあたりをさんざんさがし回ったあげく、住み心地すまいちちのよさそうな借家も見当たらずじまいに、むなしく植木坂うえきざかのほうへ帰つて行つた。いつでもあの坂の上に近いところへ出ると、そこに自分らの家路が見えて来る。だれかしら見知つた顔にもあう。暮れから道路工事の始まつていた電車通りも石やアスファルトにすっかり敷きかえられて、橡とちの並み木のすがたもなんとなく見直す時だ。私は次郎と二人ふたりでその新しい歩道を踏んで、鮎屋すしやの店の前あたりからある病院のトタン堀べいに添うて歩いて行つた。植木坂は勾配こうばいの急な、狭い坂だ。その坂の降り口に見える古い病院の窓、そこにある煉瓦堀れんがべい、そこにある蔦つたの蔓つる、すべて身にしみるように思われてきた。

下女のお徳は家のほうに私たちを待っていた。私たちが坂の下の石段を降りるのを足音で聞き知るほど、もはや三年近くもお徳は私の家に奉公していた。主婦というもののない私の家では、子供らの着物の世話まで下女に任せてある。このお徳は台所のほうから肥つた笑顔^{えがお}を見せて、半分子供らの友だちのような、慣れ慣れしい口をきいた。

「次郎ちゃん、いい家があつて？」

「だめ。」

次郎はがつかりしたように答えて、玄関の壁の上へ鳥打帽^{とりうちぼう}をかけた。私も冬の外套^{がいとう}を脱いで置いて、借家さがしにくたぶれた目を自分の部屋^{へや}の障子の外に移した。わずかばかりの庭も霜枯れて見えるほど、まだ春も浅かった。

私が早く自分の配偶者^{つれあい}を失い、六歳を頭^{かしら}に四人の幼いものをひかえるようになった時から、すでにこんな生活は始まったのである。私はいろいろな人の手に子供らを託してみ、いろいろな場所にも置いてみたが、結局父としての自分が進んでめんどろをみるよりほかに、母親のない子供らをどうすることもできないのを見いだした。不自由な男の手一つでも、どうにかわが子の養えないことはあるまい、その決心にいたったのは私が遠い外国の旅から自分の子供のそばに帰って来た時であつた。そのころの太郎はようやく小学の課程

を終わりにかけるほどで、次郎はまだ腕白盛りわんぱくざかの少年であつた。私は愛宕下あたごしたのある宿屋にいた。二部屋ふたへやあるその宿屋の離れ座敷を借り切つて、太郎と次郎の二人ふたりだけをそこから学校へ通わせた。食事のたびには宿の女中がチャブ台などを提げさながら、母屋おもやの台所のほうから長い廊下づたいに、私たちの部屋までしたくをしに來てくれた。そこは地方から上京するなじみの客をおもに相手としているような家で、入れかわり立ちかわり滞在する客も多い中に、子供を連れながら宿屋すまいずまいする私のようなものもめずらしいと言われた。

外国の旅の経験から、私も簡単な下宿生活に慣れて來た。それを私は愛宕下あたごしたの宿屋に應用したのだ。自分の身のまわりのことはなるべく人手を借りずに。そればかりでなく、子供にあてがう菓子も自分で町へ買いに出たし、子供の着物も自分でたた畳んだ。

この私たちには、いつのまにか、いろいろな隠し言葉もできた。

「あゝ、また太郎さんが泣いちやつた。」

私はよくそれを言つた。少年の時分にはありがちなことながら、とかく兄のほうは「泣き」やすかつたから、夜中に一度ずつは自分で目をさまして、そこに眠っている太郎を呼び起こした。子供の「泣いたもの」の始末にも人知れず心を苦しめた。そんなことで顔をあか紅めさせるでもあるまいと思つたから。

次第に、私は子供の世界に親しむようになった。よく見ればそこにも流行というものがあつて、石蹴り^{いしけ}、めんこ、劍玉^{けんだま}、べい独樂^{ごま}というふうに、あるものはやりあるものはすたれ、子供の喜ぶおもちゃの類までが時につれて移り変わりつつある。私はまた、二人の子供の性質の相違をも考えるようになった。正直で、根氣^{こんき}よくて、目をパチクリさせるような癖のあるところまで、なんとなく太郎は義理ある祖父^{おじい}さんに似てきた。それに比べると次郎は、私の甥^{おい}を思い出させるような人なつこいところと氣象の鋭さがあつた。この弟のほうの子供は、宿屋の亭主^{ていしゅ}でもだれでもやりこめるほどの理屈屋^{いはい}だった。

盆^{はぎ}が来て、みそ萩^{ほおぎ}や酸漿^{しょうりょう}で精霊^{しょうりょう}棚^{だな}を飾るころには、私は子供らの母親の位牌^{いはい}を旅の鞆^{かばん}の中から取り出した。宿屋^{おがら}ずまいする私たちも門口^{かどぐち}に出て、宿の人たちと一緒に麻幹^{あから}を焚^たいた。私たちは順に迎え火の消えた跡をまたいだ。すると、次郎はみんなの見ている前で、

「どれ三ちゃんや末ちゃんの分をもまたいで——」

と言つて、二度も三度も焼け残つた麻幹^{あから}の上を飛んだ。

「ああいうところは、どうしても次郎ちゃんだ。」

と、宿屋の亭主^{ていしゅ}は快活に笑つた。

ややもすれば兄をしのごうとするこの弟の子供を制おさえて、何を言われても黙しだつて順したがつて
いるような太郎の性質を延ばして行くということに、絶えず私は心を勞しつづけた。その
心づかいは、子供から目を離させなかった。町の空で、子供の泣き声やけんかする声でも
聞きつけると、私はすぐに座をたつた。離れ座敷の廊下に出てみた。それが自分の子供の
声でないことを知るまでは安心しなかった。

私のところへは来客も多かった。ある酒好きな友だちが、この私を見に来たあとで、
「久しぶりでどこかへ誘おうと思つたが、ああして子供をひかえているところを見ると、
どうしてもそれが言い出せなかった、」と、人に語つたという。その話を私は他の友だち
の口から聞いた。でも、私も、引つ込んでばかりはいられなかった。世間に出て友だち仲
間に交わりたような夕方でも来ると、私は太郎と次郎の二人を引き連れて、いつでも腰こ
巾しぎんちやく着きづきで出かけた。

そのうちに、私は末子をもその宿屋に迎えるようになった。私は額ひたいに汗あせする思いで、末
子を迎えた。

「二人育てるも、三人育てるも、世話する身には同じことだ。」
と、私も考え直した。長いこと親戚しんせきのほうに預けてあつた娘が学齡に達するほど成人

して、また親のふところに帰って来たということは、私に取つての新しいよろこびでもあった。そのころの末子はまだ人に髪を結ってもらつて、お手玉や千代紙に余念もないほどの小娘であつた。宿屋の庭のままごとに、松葉を魚の形につなぐことなどは、ことにその幼い心を楽しませた。兄たちの学校も近かつたから、海老茶色の小娘らしい袴に学校用の鞆で、末子をもその宿屋から通わせた。にわかに夕立でも来そうな空の日には、私は娘の雨傘を小わきにかかえて、それを学校まで届けに行くことを忘れなかつた。

私たち親子のものは、足掛け二年ばかりの宿屋すまいのあとで、そこを引き揚げることにした。愛宕下から今の住居のあるところまでは、歩いてもう遠くない。電車の線路に添うて長い榎坂を越せば、やがて植木坂の上に出られる。私たちは宿屋の離れ座敷にあつた古い本箱や机や筆筒などを荷車に載せ、相前後して今の住居に引き移つて来たのである。

今の住所へは私も多くの望みをかけて移つて来た。婆やを一人雇い入れることにしたのもその時だ。太郎はすでに中学の制服を着る年ごろであつたから、すこし遠くても電車で私の母校のほうへ通わせ、次郎と末子の二人を愛宕下の学校まで毎日歩いて通わせた。そ

のころの私は二階の部屋へやに陣取つて、階下を子供らと婆やにあてがった。

しばらくするうちに、私は二階の障子のそばで自分の机の前にすわりながらも、階下に起こるいろいろな物音や、話し声や、客のおとずれや、子供らの笑う声までを手に取るように知るようになった。それもそのはずだ。餌えきを拾う雄鶏おんどりの役目と、羽翅はねをひろげて雛ひなを隠す母鶏ははどりの役目とを兼ねなければならなかったような私であつたから。

どうかすると、末子のすすり泣く声が階下から伝わつて来る。それを聞きつけるたびに、私はしかけた仕事を捨てて、梯子段はしごだんを駆け降りるように二階から降りて行つた。

私はすぐ茶の間の光景を読んだ。いきなり箆笥たんすの前へ行つて、次郎と末子の間にはいつた。太郎は、と見ると、そこに争つてゐる弟や妹をなだめようでもなく、ただ途方に暮れている。婆やまでそこいらにまごまごしている。

私は何も知らなかつた。末子は何をしたのか、どうして次郎がそんなにまで平素のきげんをそこねているのか、さっぱりわからなかつた。ただただ私は、まだ兄たち二人とのなじみも薄く、こころぼそく、とかく里心さとこころを起こしやすすくしている新参者しんさんものの末子がそこに泣いてゐるのを見た。

次郎は妹のほうを鋭く見た。そして言つた。

「女のくせに、いばつていやがらあ。」

この次郎の怒気を帯びた調子が、はげしく私の胸を打った。

兄とは言つても、そのころの次郎はようやく十三歳ぐらいの子供だった。日ごろ感じやすく、涙もろく、それだけ激しやすい次郎は、私の陰に隠れて泣いている妹を見ると、さもいまいましそうに、

「とうさんが来たと思つて、いい気になつて泣くない。」

「けんかはよせ。末ちゃんを打つなら、さあとうさんを打て。」

と、私は筆筒たんすの前に立つて、ややもすれば妹をめぐけて打ちかかろうとする次郎をさえぎった。私は身をもつて末子をかばうようにした。

「とうさんが見ていないとすぐこれだ。」と、また私は次郎に言った。「どうしてそうわからないんだろくなあ。末ちゃんはお前たちとは違うじゃないか。他よそからとうさんの家へ歸つて来た人じゃないか。」

「末ちゃんのおかげで、僕がとうさんにしかられる。」

その時、次郎は子供らしい大声を揚げて泣き出してしまった。

私は家の内を見回した。ちょうど町では米騒動以来の不思議な沈黙がしばらくあたりを

支配したあとであった。市内電車従業員の罷業ひぎようのうわさも伝わって来るころだ。植木坂の上を通る電車もまれだった。たまに通る電車は町の空に悲壮な音を立てて、窪くぼい谷の下にあるような私の家の四畳半の窓まで物すごく響けて来ていた。

「家の内も、外も、嵐だ。あらし」

と、私は自分に言った。

私が二階の部屋へやを太郎や次郎にあてがい、自分は階下へ降りて来て、玄関側わきの四畳半にすわるようになったのも、その時からであった。そのうちに、私は三郎をも今の住居すまいのほうに迎えるようになった。私はひとりで手をもみながら、三郎をも迎えた。

「三人育てるも、四人育てるも、世話する身には同じことだ。」

と、末子を迎えた時と同じようなことを言った。それからの私は、茶の間にいる末子はしごだんがよく見えるようなところで、二階の梯子段はしごだんをのぼったり降りたりする太郎や次郎や三郎の足音もよく聞こえるようなところで、ずっとすわり続けてしまった。

こんな世話も子供だからできた。私は足掛け五年近くも奉公していた婆やにも、それから今のお徳にも、串談じようだん半分によくそう言つて聞かせた。もしこれが年寄りの世話であ

つたら、いつまでも一つ事を気に掛けるような年老いた人たちをどうしてこんなに養えるものではないと。

私たちがしきりにさがした借家も容易に見当たらなかつた。好ましい住居すまいもすくないものだった。三月の節句も近づいたところに、また私は次郎を連れて一軒別の借家を見に行つて来た。そこは次郎と三郎とでくわしい見取り図まで取つて来た家で、二人ふたりともひどく気に入つたと言つていた。青山五丁目まで電車で、それから数町ばかり歩いて行つたところを左へ折れ曲がつたような位置にあつた。部屋の数が九つもあつて、七十五円なら貸す。それでも家賃が高過ぎると思うなら、今少しは引いてもいいと言われるほど長く空屋あきやになつていた古い家で、造作もよく、古風な中二階などことにおもしろくできていたが、部屋が多過ぎていまだに借り手がないとのこと。よっぽど私も心が動いて歸つて来たが、一晚寝て考えた上に、自分の住居すまいには過ぎたものとあきらめた。

適当な借家の見当たり次第に移つて行こうとしていた私の家では、障子も破れたまま、かまわずに置いてあつた。それが気になるほど目について来た。せめて私は毎日ながめ暮らす身のまわりだけでも繕いたいと思つて、障子の切り張りなどをしてしていると、そこへ次郎が来て立つた。

「とうさん、障子なんか張るのかい。」

次郎はしばらくそこに立つて、私のすることを見ていた。

「引つ越して行く家の障子なんか、どうでもいいのに。」

「だって、七年も雨^{あめ}露^{つゆ}をしのいで来た屋根の下じゃないか。」

と私は言つてみせた。

煤^{すす}けた障子の膏^{こう}藥^{やく}張りを続けながら、私はさらに言葉をつづけて、

「ホラ、この前に見て来た家サ。あそこはまるで主人公本位にできた家だね。主人公さえよければ、ほかのものなぞはどうでもいいという家だ。ただ、主人公の部屋^{へや}だけが立派だ。ああいう家を借りて住む人もあるかなあ。そこへ行くと、二度目に見て来た借家のほうがどのくらいいいかしれないよ。いかに言つても、とうさんの家には大き過ぎるね。」

「僕も最初見つけた時に、大き過ぎると思つたが——」

この次郎は私の話を聞いているのかと思つたら、何かもじもじしていたあとで、私の前に手をひろげて見せた。

「とうさん、月給は？」

この「月給」が私を笑わせた。毎月、私は三人の子供に「月給」を払うことにしていた。

月の初めと半ばとの二度に分けて、半月に一円ずつの小遣^{づかい}を渡すのを私の家ではそう呼んでいた。

「今月はまだ出さなかつたかねえ。」

「とうさん、きようは二日^{ふつか}だよ。三月の二日だよ。」

それを聞いて、私は黒いメリンスを巻きつけた兵児帯^{へこおび}の間から蝦蟇口^{がまぐち}を取り出した。その中にあつた金を次郎に分け、ちようどそこへ屋外^{そと}からテニスの運動具をさげて帰つて来た三郎にも分けた。

「へえ、末ちゃんにも月給。」

と、私は言つて、茶の間の廊下の外で古い風琴^{オルガン}を静かに鳴らしている娘のところへも分けに行つた。その時、銀貨二つを風琴^{オルガン}の上に載せた戻り^{もと}がけに、私は次郎や三郎のほうを見て、半分串^{じょうだん}談の調子で、

「天麴羅^{てんぷら}の立食^{たちぐい}なんか、ごめんだぜ。」

「とうさん、そんな立食なんかするものか。そこは心得ているから安心しておいでよ。」
と次郎は言つた。

楽しい桃の節句の季節は来る、月給にはありつく、やがて新しい住居^{すまい}での新しい生活も

始められる、その一日は子供らの心を浮き立たせた。末子も大きくなつて、もう雛いじりでもあるまいというところから、茶の間の床には古い小さな雛と五人囃子ばやしなぞをやるしばかりに飾つてあつた。それも子供らの母親がまだ達者たっしやな時代からの形見かたみとして残つたものばかりだつた。私が自分の部屋に戻つて障子の切り張りを済ますころには、茶の間のほうで子供らのさかなな笑い声が起こつた。お徳のにぎやかな笑い声もその中にまじつて聞こえた。

見ると、次郎は雛壇ひなだんの前あたりで、大騒ぎを始めた。暮れの築地小劇場で「子供の日のあつたおりに、たしか「そら豆の煮えるまで」に出て来る役者から見て来たらしい身ぶり、手まねが始まつた。次郎はしきりに調子に乗つて、手を左右に振りながら茶の間を踊つて歩いた。

「オイ、とうさんが見てるよ。」

と言つて、三郎はそこへ笑いころげた。

私たちの心はすでに半分今の住居すまいを去つていた。

私は茶の間に集まる子供らから離れて、ひとりで自分の部屋へやを歩いてみた。わずかばか

りの庭を前にした南向きの障子からは、家じゅうでいちばん静かな光線がさして来ている。東は窓だ。二枚のガラス戸越しに、隣の大屋おおやさんの高い堀へと檜かしの樹きとがこちらを見おろすように立っている。その窓の下には、地下室にでもあるような静かさがある。

ちようど三年ばかり前に、五十日あまりも私の寢床が敷きづめに敷いてあったのも、この四畳半の窓の下だ。思いがけない病が五十の坂を越したころの身に起こって来た。私はどつと床についた。その時の私は再び起たつこともできまいかと人に心配されたほどで、茶の間に集まる子供らまで一時沈まり返ってしまった。

どうかすると、子供らのすることは、病んでいる私をいらいらさせた。

「とうさんをおこらせることが、とうさんのからだにはいちばん悪いんだぜ。それくらいのことがお前たちにわからないのか。」

それを私が寝ながら言ってみせると、次郎や三郎は頭をかいて、すごすごと障子のかげのほうへ隠れて行ったこともある。

それからの私はこの部屋に臥ねたり起きたりして暮らした。めずらしく気分のよい日が来たあとには、また疲れやすく、眩暈めまい心地ごこちのするような日が続いた。毎朝の気分がその日その日の健康を予報する晴雨計だった。私の健康も確実に回復するほうに向かつて行つたが、

いかに言つてもそれが遅緩で、もどかしい思いをさせた。どれほどの用心深さで私はおり
おりの暗礁あんしょうを乗り越えようと努めて来たかしのない。この病弱な私が、ともかくも住
居まいを移そうと思ひ立つまでにこぎつけた。私は何かこう目に見えないものが群がり起こつ
て来るような心持ちで、本棚ほんだながわりに自分の蔵書のしまつてある四畳半の押入れをもあ
けて見た。いよいよこの家を去ろうと心をきめてからは、押入れの中なぞも、まるで物置
きのようになつていた。世界を家とする巡礼者のような心であちこちと提さげ回つた古い靴かばん
——その外国の旅の形見が、まだそこに残つていた。

「子供でも大きくなつたら。」

私はそればかりを願つて来たようなものだ。あの愛宕下あたごしたの宿屋のほうで、太郎と次郎
の二人ふたりだけをそばに置いたころは、まだそれでも自由がきいた。腰巾着こしぎんちやくづきでもなん
でも自分の行きたいところへ出かけられた。末子を引き取り、三郎を引き取りするうちに、
目には見えなくても降り積もる雪のような重いものが、次第に深くこの私を埋うずめた。

しかし私はひとりで子供を養つてみているうちに、だんだん小さなものの方へ心をひか
れるようになって行つた。年若い時分には私も子供なぞはどうでもいいと考えた。かえつ

て手足まといだらに考えたこともあつた。知る人もすくない遠い異郷の旅などをして、
み、帰国後は子供のそばに暮らしてみ、次第に子供の世界に親しむようになってみると、
以前に足手まといのように思つたその自分の考え方を改めるようになった。世はさびしく、
時は難い。明日は、明日はと待ち暮らしてみても、いつまで待ってもそんな明日がやつて
来そうもない、眼前に見る事柄から起こつて来る多くの失望と幻滅の感じとは、いつでも
私の心を子供に向けさせた。

そうは言つても、私が自分のすぐそばにいるものの友だちになれたわけではない。私は
今の住居に移つてから、三年も子供の大きくなるのを待った。そのころは太郎もまだ中学
へ通い、婆やも家に奉公していた。釣りだ遠足だと言つて日曜ごとに次郎もじつとしてい
なかつた時代だ。いったい、次郎はおもしろい子供で、一人で家の内をにぎやかしていた。
夕飯後の茶の間に家のものが集まつて、電燈の下で話し込む時が来ると、弟や妹の聞きた
がる怪談などを始めて、夜のふけるのも知らずに、皆をこわがらせたり楽しませたりする
のも次郎だ。そのかわり、いたずらもはげしい。私がよく次郎をしかつたのは、この子を
たしなめようと思つたばかりでなく、一つには婆やと子供らの間を調節したいと思つたか
らで。太郎びいきの婆やは、何かにつけて「太郎さん、太郎さん」で、それが次郎をいら

いらさせた。

この次郎がいつになく顔色を変えて、私のところへやって来たことがある。

「わがままだ、わがままだって、どこが、わがままだ。」

見ると次郎は顔色も青ざめ、少年らしい怒りに震えている。何がそんなにこの子を憤らせたのか、よく思い出せない。しかし、私も黙ってはいられなかったから、

「お前のあばれ者は研究所でも評判だというじゃないか。」

「だれが言った——」

「弥生町やよいちちょうの奥さんがいらした時に、なんでもそんな話だったぜ。」

「知りもしないくせに——」

次郎が私に向かつて、こんなふうに強く出たことは、あとにも先にもない。急に私は自分を反省する気にもなつたし、言葉の上の争いになつてもつまらないと思つて、それぎり口をつぐんでしまった。

次郎がぶいと表へ出て行つたあとで、太郎は二階の梯子段はしごだんを降りて来た。その時、私は太郎をつかまえて、

「お前はあんまりおとなし過ぎるんだ。お前が一番のにいさんじゃないか。次郎ちゃんに

言つて聞かせるのも、お前の役じゃないか。」

太郎はこの側杖そばづえをくうと、持ち前のように口をとがらしたぎり、物も言わないで引き下がってしまった。そういう場合に、私のところへ来て太郎を弁護するのは、いつでも婆やだった。

しかし、私は子供をしかつて置いては、いつでもあとで悔いた。自分ながら、自分の声とも思えないような声の出るにあきれた。私はひとりでくちびるをかんで、仕事もろろく手につかない。片親の悲しさには、私は子供をしかる父であるばかりでなく、そこへ提さげに出る母をも兼ねなければならなかった。ちょうど三時の菓子でも出す時が来ると、一ひ人で二役を兼ねる俳優のように、私は母のほうに早がわりして、茶の間の火鉢ひばちのそばへ盆を並べた。次郎の好きな水菓子などを載せて出した。

「さあ、次郎ちゃんもおあがり。」

すると、次郎はしぶしぶそれを食つて、やがてきげんを直すのであつた。

私の四人の子供の中で、三郎は太郎と三つちがい、次郎とは一つちがいの兄きょうだい弟にあたる。三郎は次郎のあばれ屋ともちがい、また別の意味で、よく私のほうへ突きかかつて来た。何をこしらえて食わせ、何を買つて来てあてがつても、この子はまだ物足りないよ

うな顔ばかりを見せた。私の姉の家のほうから帰って来たこの子は、容易に胸を開こうとしなかったのである。上に二人も兄が^{ふたり}あつて絶えず頭を押えられることも、三郎を不平にしたらしい。それに、次郎びいきのお徳が婆やにかわつて私の家へ奉公に来るようになってからは、今度は三郎が納まらない。ちょうど婆やの太郎びいきで、とかく次郎が納まらなかったように。

「三ちゃん、人をつねつちやいやですよ。ひどいことをするのねえ、この人は。」

「なんだ。なんにもしやしないじやないか。ちよつとさわつたばかりじやないか——」

お徳と三郎の間には、こんな小ぜり合いが絶えなかった。

「とうさんはお前たちを悪くするつもりでいるんじゃないよ。お前たちをよくするつもりで育てているんだよ。かあさんでも生きててごらん、どうして言うことをきかないような子供は、よつぽどひどい目にあうんだぜ——あのかあさんは気が短かったからね。」

それを私は子供らに言い聞かせた。あまり三郎が他人行儀なのを見ると、時には私は思い切り打ち懲らそうと考えたこともあつた。ところが、ちいさな時分から自分のそばに置いた太郎や次郎を打ち懲らすことはできても、十年他^{よそ}に預けて置いた三郎に手を下すことは、どうしてもできなかった。ある日、私は自分の忿^{いか}りを制^{おさ}えきれないことがあつて、今

の住居すまいの玄関のところで、思わずそこへやって来た三郎を打った。不思議にも、その日からの三郎はかえって私になじむようになって来た。その時も私は自分の手荒な仕打ちをあ
とで悔よそいはしたが。

「十年他よそへ行つていたものは、とうさんの家へ帰つて来るまでに、どうしたつてまた十年はかかる。」

私はそれを家のものに言つてみせて、よく嘆息した。

私たちが住み慣れた家の二階は東北が廊下になつてゐる。窓が二つある。その一つからは、小高い石垣いしがきと板塀いたべいとを境に、北隣の家の茶の間の白い小障子まで見える。三郎はよくその窓へ行つた。遠い郷里のほうの木曾川きそがわの音や少年時代の友だちのことなどを思い出し顔に、その窓のところでしきりに鶯うぐいすのなき声のまねを試みた。

「うまいもんだなあ。とても鶯うぐいすの名人だ。」

三郎は階下の台所に来て、そこに働いてゐるお徳にまで自慢して聞かせた。

ある日、この三郎が私のところへ来て言つた。

「とうさん、僕の鶯うぐいすをきいた？　僕がホウ、ホケキヨとやると、隣の家のほうでもホウ、ホケキヨとやる。僕は隣の家に鶯が飼つてあるのかと思つた。それほど僕もうまくなつた

かなあと考えた。ところがねえ、本物の鶯が僕に調子を合わせていると思ったのは、大間違いサ。それが隣の家に泊まっている大学生サ。」

何かしら常に不満で、常にひとりぼっちで、自分のことしか考えないような顔つきをしている三郎が、そんな鶯のまねなどを思いついて、寂しい少年の日をわずかに慰めているのか。そう思うと、私はこの子供を笑えなかった。

「かあさんさえ達者でいたら、こんな思いを子供にさせなくとも済んだのだ。もつと子供も自然に育つのだ。」

と、私も考えずにはいらなかった。

私が地下室にたとえてみた自分の部屋の障子へは、町の響きが遠く伝わって来た。私はそれを植木坂の上のほうにも、浅い谷一つ隔てた狸穴の坂のほうにも聞きつけた。私たちの住む家は西側の塀を境に、ある邸つづきの抜け道に接していて、小高い石垣の上を通る人の足音や、いろいろな物売りの声がそこにも起こった。どこの石垣のすみで鳴くとも知れないような、ほそぼそとした地虫の声も耳にはいる。私は庭に向いた四畳半の縁先へ鉢を持ち出して、よく延びやすい自分の爪を切った。

どうかすると、私は子供と一緒に遊ぼうような心も失ってしまい、自分の狭い四畳

半に隠れ、庭の草木を友として、わずかにひとりを慰めようとした。子供は到底母親だけのものか、父としての自分は偶然に子供の内を通り過ぎる旅人に過ぎないのか——そんな嘆息が、時には自分を憂鬱ゆううつにした。そのたびに氣を取り直して、また私は子供を護まもろうとする心に歸つて行つた。

安い思いもなしに、移り行く世相をながめながら、ひとりでじつと子供を養つて来た心地こちはなかった。しかし子供はそんな私に頓とん着じゃくしていなかったように見える。

七年も見ているうちには、みんなの変わつて行くにも驚く。震災の来る前の年あたりに太郎はすでに私のそばにいなかった。この子は十八の歳としに中学を辞して、私の郷里の山地のほうで農業の見習いを始めていた。これは私の勧めによることだが、太郎もすっかりその氣になつて、長いしたくに取りかかった。ラケットを鍬くわに代えてからの太郎は、学校時代よりもずっと元氣づいて来て、翌年あたりにはもう七貫目ほどの桑を背負いうるような若者であつた。

次郎と三郎も変わつて来た。私が五十日あまりの病床から身を起こして、発病以来初めての風呂ふろを浴びに、鼠ねずみ坂ざかから森元町もりもとちょうの湯屋まで静かに歩いた時、兄きょうだい弟ふたり二人と

も心配して私のからだを洗いについて来たくらいだ。私の顔色はまだ悪かった。私は小田^{おだ}原^{わら}の海岸まで保養を思い立ったこともある。その時も次郎は先に立って、弟と一緒に、小田原の停車場まで私を送りに来た。

やがて大地震だ。私たちは引き続く大きな異変の渦^{うず}の中にいた。私が自分のそばにいる^{きようだい}兄^い妹^{めい}三人の子供の性質をしみじみ考えるようになったのも、早川^{はやかわけん}賢^{けん}というように思いがけない人の名を三郎の口から聞きつけるようになったのも、そのころからだ。

毎日のような三郎の「早川賢、早川賢」は家のものを悩ました。きのうは何十人の負傷者がこの坂の上をかつがれて通ったとか、きようは焼け跡へ焼け跡へと歩いて行く人たちが舞い上がる土ぼこりの中に続いたとか、そういう混雑がやや沈まって行ったところに、幾万もの男や女の墓地のような焼け跡から、三つの疑問の死骸^{しがい}が暗い井戸の中に見いだされたという驚くべきうわさが伝わった。

「あゝ——早川賢もついに死んでしまったか。」

この三郎の感傷的な調子には受け売りらしいところもないではなかったが、まだ子供だ子供だとばかり思っていたものかもはやこんなことを言うようになったかと考えて、むしろ私にはこの子の早熟が気にかかった。

震災以来、しばらく休みの姿であった洋画の研究所へも、またポツポツ研究生の集まるところであつた。そこから三郎が目を光らせて帰つて来るたびにいつでも同じ人のうわさをした。

「僕らの研究所にはおもしろい人がいるよ。『早川賢だけは、生かして置きたかつたねえ』——だとサ。」

無邪気な三郎の顔をながめていると、私はそう思った。どれほどの冷たい風が毎日この子の通う研究所あたりまでも吹き回している事かと。私はまた、そう思った。あの米騒動以来、だれしもの心を揺り動かさずには置かないような時代の焦躁しょうそうが、右も左もまだほんとうにはよくわからない三郎のような少年のところまでもやって来たかと。私は屋外そとからいろいろなことを聞いて来る三郎を見るたびに、ちょうど強い雨にでもぬれながら帰つて来る自分の子供を見る気がした。

私たちの家では、坂の下の往来への登り口にあたる石段のそばの塀へいのところに、大きな郵便箱を出してある。毎朝の新聞はそれで配達を受けることにしてある。取り出して来て見ると、一日として何か起こっていない日はなかった。あの早川賢が横死おうしを遂げた際に、同じ運命を共にさせられたという不幸な少年一太のことなぞも、さかんに書き立ててあつ

た。またかと思うような号外売りがこの町の界限^{かいわい}へも鈴を振り立てながら走ってやって来て、大げさな声で、そこいらに不安をまきちらして行くだけでも、私たちの神経がとがらずにはいられなかった。私は、年もまだ若く心も柔らかい子供らの目から、殺人、強盗、放火、男女の情死、官公吏の腐敗、その他胸もふさがるような記事で満たされた毎日の新聞を隠したかった。あいにくと、世にもまれに見る可憐^{かれん}な少年の写真が、ある日の紙面の一隅^{いちぐう}に大きく掲げてあった。評判の一太だ。美しい少年の生前の面影^{おもかげ}はまた、いつその死をあわれに見せていた。

末子やお徳は茶の間に集まって、その日の新聞をひろげていた。そこへ三郎が研究所から帰って来た。

「あ——一太。」

三郎はすぐにそれへ目をつけた。読みさしの新聞を妹やお徳の前に投げ出すようにして言った。

「こんな、罪もない子供までも殺す必要がどこにあるだろう——」

その時の三郎の調子には、子供とも思えないような力があつた。

しかし、これほどの熱狂もいつのまにか三郎の内を通り過ぎて行った。伸び行くさかり

の子供は、一つところにとどまろうとしていなかった。どんどんきのうのことを捨てて行った。

「オヤ——三ちゃんの『早川賢』もどうしたろう。」

と、ふと私が気づいたころは、あれほど一時大騒ぎした人の名も忘れられて、それが

「木下繁きのしたげ、木下繁」に変わっていた。木下繁もはや故人だが、一時は研究所あたりに

集まる青年美術家の憧憬どうけいの的まととなった画家で、みんなから早い病死を惜しまれた人だ。

その時になって見ると、新しいものを求めて熱狂するような三郎の氣質が、なんとなく私の胸にまとまって浮かんで来た。どうしてこの子がこんなに大騒ぎをやるかというに——早川賢にしても、木下繁にしても——彼らがみんな新しい人であるからであつた。

「とうさんは知らないんだ——僕らの時代のことはとうさんにはわからないんだ。」

訴えるようなこの子の目は、何よりも雄弁にそれを語った。私もまんざら、こうした子供の気持ちかわからないでもない。よりすぐれたものとなるためには、自分らから子供そむを叛かせたい——それくらいのは考えない私でもない。それにしても、少年らしい不満でさんざん子供から苦しめられた私は、今度はまた新しいもので責められるようになるのかと思つた。

末子も目に見えてちがつて来た、堅^{かたぶと}肥^ひりのした体格から顔つきまで、この娘はだんだんみんなの母親に似て来た。上^{うえ}は男の子供ばかりの殺風景な私の家^{うち}にあっては、この娘が茶の間の壁のところ^{さば}に小乾^{さば}す着物の類も目につくようになった。それほど私の家には女らしいものも少なかった。

今の住居^{すまい}の庭は狭くて、私が猫^{ねこ}の額^{ひたい}にたとえるほどしかないが、それでも薔薇^{ばら}や山茶花^{さざんか}は毎年のように花が絶えない。花の好きな末子は茶の間から庭へ降りて、わずかばかりの植木を見に行くことにも学校通いの余暇を慰めた。今の住居^{すまい}の裏側にあたる二階の窓のところへは、巢^{はち}をかけに来る蜂^{はち}があつて、それが一昨年^{おとし}も来、去年も来、何か私の家にはよい事でもある前兆のように隣近所の人たちから騒^{さわ}がれたこともある。末子はその窓の見える抜け道を通つては毎日学校のほうから歸つて来た。そして、好きな裁縫や編み物のような、静かな手芸に飽きることを知らないような娘であつた。そろそろ女の洋服がはやつて来て、女学校通いの娘たちが靴^{くつ}だ帽子だと新規な風俗をめずらしがるころには、末子も紺地^{うわぎ}の上着^{えり}に襟^{えり}のところだけ紫の刺繡^{ぬい}のしてある質素な服をつくつた。その短い上着のまま、早い桃の実の色した素足^{すあし}を脛^{すね}のあたりまであらわしながら、茶の間を歩き回るなども、今までの私の家には見られなかつた図だ。

この娘がぱったり洋服を着なくなつた。私も多少本場を見て来たその自分の経験から、
 「洋服のことならとうさんに相談するがいいぜ」なぞと末子に話したり、帯で形をつける
 ことは東西の風俗ともに変わりがないと言ひ聞かせたりして、初めて着せて見る娘の洋服
 には母親のような注意を払つた。十番で用の足りないものは、銀座^{ぎんざ}まで買いにお徳を娘に
 つけてやつた。それほどにして造りあげた帽子も、服も、付属品^{ふたつ}いっさいも、わずか二
 月^きほどの役にしか立たないを知つた時に私も驚いた。

「串談^{じやうだん}じゃないぜ。あの上着は十八円もかかつてるよ。そんなら初めから洋服なぞを
 造らなければいいんだ。」

日ごろ父一人^{ひとり}をたよりにしている娘も、その時ばかりは私の言うことを聞き入れようと
 しなかつた。お徳がそこへ来て、

「どうしても末子さんは着たくないんだそうですよ。洋服はもういらなから、ほしい人
 があつたらだれかにあげてくだすつてもいいなんて……」

こういう場合に、末子の代弁をつとめるのは、いつでもこの下女^{げにょ}だった。それにしても、
 どうかして私はせつかく新調したものを役に立てさせたいと思つて、

「洋服を着るんなら、とうさんがまた築地^{つきじ}小劇場をおごる。」

と言つてみせた。すると、お徳がまた娘の代わりに立つて来て、

「築地へは行きたいし、どうしても洋服は着たくないし……」

それが娘の心持ちだった。その時、お徳はこんなこともつけたして言った。

「よくよく末子さんも、あの洋服がいやになったと見えますよ。もしかしたら、屑屋くずやに売
つてくれてもいいなんて……」これほどの移りやすさが年とし若わかな娘の内に潜んでいようと
は、私も思いがけなかった。でも、私も子に甘い証拠には、何かの理由さえあれば、それ
で娘のわがママを許したいと思つたのである。お徳に言わせると、末子の同級生で新調の
校服を着て学校通いをするような娘は今は一人もないとのことだった。

「そんなに、みんな迷っているのかなあ。」

「なんでも『赤襟あかえりのねえさん』なんて、次郎ちゃんたちがからかったものですから、あ
れから末子さんも着なくなつたようですよ。」

「まあ、あの洋服はしまつて置くサ。また役に立つ日も来るだろう。」

とうとう私には娘のわがママを許せるほどのはつきりした理由も見当たらずじまいであ
つた。私は末子の「洋服」を三郎の「早川賢」や「木下繁」にまで持つて行つて、娘は娘
なりの新しいものに迷い苦しんでいるのかと想おもつてみた。時には私は用達ようたしのついでに、

坂の上の電^{みち}車^{ろつぽんぎ}路^ぎを六本木まで歩いてみた。婦人の断髪はやや下火でも、洋装はまだこれからというところで、思い思いに流行の風俗を競おうとするような女学校通いの娘たちが右からも左からもあの電車の交^{こうさてん}差^さ点^{てん}に群がり集まっていた。

私たち親子のものが今の住^{すまい}居^いを見捨てようとしたところには、こんな新しいものも遠い「きのう」のここのようになっていた。三郎などは、「木下繁」ですらもはや問題でないという顔つきで、フランス最近の画界を代表する人たち——ことに、ピカソなどを口にするような若者になっていた。

「とうさん、今度来たビツシエールの画^えはずいぶん変わっているよ。あの人は、どんどん変わって行く——確かに、頭がいいんだろうね。」

この子の「頭がいいんだろうね」には私も吹き出してしまった。

私の話相手——三人の子供はそれぞれに動き変わりつつあった。三人の中でも兄^{にい}さん顔の次郎などは、五分刈^{ごぶが}りであつた髪を長めに延ばして、紺^{こん}飛^が白^{すり}の筒^{つつ}袖^{そで}を袂^{たもと}に改めた——それもすこしきまりの悪そうに。顔だけはまだ子供のようなあの末子までが、いつのまにか本^{ほん}裁^{だち}の着物を着て、女らしい長い裾^{すそ}をはしよりながら、茶の間を歩き回るほどに成人した。

「子供でも大きくなったら。」

長いこと待ちに待ったその日が、ようやく私のところへやって来るようになった。しかしその日が来るころには、私はもう動けないような人になってしまふかと思うほど、そんなに長くすわり続けた自分を子供らのそばに見いだした。

「強い嵐あらしが来たものだ。」

と、私は考えた。

「とうさん——家はありそうで、なかなかないよ。僕と三ちゃんどで毎日のように歩いて見た。二人でふたりすつきりさがして見た。この麻布あさふから青山へんへかけて、もう僕らの歩かないところはない……」

と、次郎が言うころは、私たちの借家さがしもひと休みの時だった。なるべく末子の学校へ遠くないところに、そんな注文があつた上に、よさそうな貸し家も容易に見当たらなかつたのである。あれからまた一軒あるにはあつて、借り手のつかないうちにと大急ぎで見に行つて来た家は、すでに約束ができていた。今の住居すまいの南隣に三年ばかりも住んだ家族が、私たちよりも先に郊外のほうへ引越して行つてしまつてからは、いっそう周囲も

ひっそりとして、私たちの庭へ来る春もおそかった。

めずらしく心持ちのよい日が私には続くようになった。私は庭に向いた部屋へやの障子をあけて、とかく気になる自分の爪つめを切っていた。そこへ次郎が来て、

「とうさんはどこへも出かけないんだねえ。」

と、さも心配するように、それを顔にあらわして言った。

「どうしてとうさんの爪はこう延びるんだろう。こないだ切ったばかりなのに、もうこんなに延びちゃった。」

と、私は次郎に言ってみせた。貝かいづめ爪というやつで、切っても、切っても、延びてしかたがない。こんなことはずっと以前には私も気づかなかったことだ。

「とうさんも弱くなつたなあ。」

と言わぬばかりに、次郎はややしばらくそこにしゃがんで、私のすることを見ていた。ちようど三郎も作画に疲れたような顔をして、油絵の筆でも洗いに二階の梯子はしごだん段を降りて来た。

「御覧、お前たちがみんなでかじるもんだから、とうさんの脛すねはこんなに細くなっちゃった。」

私は二人の子供の前へ自分の足を投げ出して見せた。病氣以来肉も落ち瘦せ、ずっと以前には信州の山の上から上州下仁田まで日に二十里の道を歩いたこともある脛とは自分ながら思われなかった。

「脛かじりと来たよ。」

次郎は弟のほうを見て笑った。

「太郎さんを入れると、四人もいてかじるんだから、たまらないや。」

と、三郎も半分他人の事のように言って笑った。そこへ茶の間の唐紙のあいたところから、ちよいと笑顔を見せたのは末子だ。脛かじりは、ここにも一人いると言うかのよう

に。
その時まで、三郎は何かもしもじして、言いたいことも言わずにいるというふうであったが、

「とうさん——ホワイトを一本と、テラ・ロオザを一本買ってくれない？　絵の具が足りなくなった。」

こう切り出した。

「こないだ買ったばかりじゃないか。」

「だって、足りないものは足りないんだもの。絵の具がなけりや、何も描^かけやしない。」
と、三郎は不平顔である。すると、次郎はさつそく弟の言葉をつかまえて、

「あ——またかじるよ。」

この次郎の串談^{じょうだん}が、みんなを吹き出させた。

私は子供らに出して見せた足をしまつて、何げなく自分の手のひらをながめた。いつでも自分の手のひらを見ていると、自分の顔を見るような氣のするのが私の癖だ。いまましいことばかりが胸に浮かんて来た。私はこの四畳半の天井からたくさん蛆^{うじ}の落ちたことを思い出した。それが私の机のそばへも落ち、畳の上へも落ち、掃いても掃いても落ちて来る音のしたことを思い出した。何が腐り爛^{ただ}れたかと薄氣味悪くなつて、二階の部屋^{へや}から床板^{ゆかいた}を引きへがして見ると、鼠^{ねずみ}の死骸^{しがい}が二つまでそこから出て来て、その一つは小さな動物の骸骨でも見るように白く曝^{さら}れていたことを思い出した。私は恐ろしくなつた。何かこう自分のことを形にあらわして見せつけるようなものが、しかもそれまで知らずにいた自分のすぐ頭の上にあつたことを思い出した。

その時になって見ると、過ぐる七年を私は嵐^{あらし}の中にすわりつづけて来たような氣もする。私のからだにあるもので、何一つその痕跡^{こんせき}をとどめないものはない。髪はめつきり白く

なり、すわり胼胝は豆のように堅く、腰は腐ってしまいそうに重かった。朝寝の枕もとに煙草盆を引きよせて、寝そべりながら一服やるような癖もついた。私の姉がそれをやった時分に、私はまだ若くて、年取った人たちの世界というものをのぞいて見たように思ったことを覚えているが、ちょうど今の私がそれと同じ姿勢で。

私はもう一度、自分の手を裏返しにして、鏡でも見るようにつくづくを見た。

「自分の手のひらはまだ紅い。」

と、ひとり思い直した。

午後のいい時を見て、私たちは茶の間の外にある縁側に集まった。そこには私の意匠した縁台が、縁側と同じ高さに、三尺ばかりも庭のほうへ造り足してあって、蘭、山査子などの植木鉢を片すみのほうに置けるだけのゆとりはある。石垣に近い縁側の突き当たりは、壁によせて末子の小さい風琴も置いてあるところで、その上には時々、の用事などを書きつける黒板も掛けてある。そこは私たちが古い籐椅子を置き、簡単な腰掛け椅子を置いて、互いに話を持ち寄りたり、庭をながめたりして来た場所だ。毎年夏の夕方には、私たちが茶の間のチャブ台を持ち出して、よく簡単な食事に集まったのもそこだ。

庭にあるおそ咲きの乙女椿の蕾もようやくふくらんで来た。それが目につくようにな

つて来た。三郎は縁台のはなに立って、庭の植木をながめながら、

「次郎ちゃん、ここの植木はどうなるんだい。」

この弟の言葉を聞くと、それまで妹と一緒に黒板の前に立って何かいたずら書きをしていた次郎が、白墨をそこに置いて三郎のいるほうへ行つた。

「そりや、引っこ抜いて持つて行つたつて、かまうもんか——もとからここの庭にあつた植木でさえなければ。」

「八つ手も大きくなりやがつたなあ。」

「あれだつて、とうさんが植えたんだよ。」

「知つてるよ。山茶花さざんかだつて、薔薇ばらだつて、そうだろう。あの乙女椿おとめつばきだつて、そうだろう。」

気の早い子供らは、八つ手や山茶花を車に積んで今にも引越して行くような調子に話し合つた。

「そんなにお前たちは無造作に考えているのか。」と、私はそこにある籐椅子とういすを引きよせて、話の仲間にはいつた。「とうさんぐらいの年齢としになつてごらん、家というものはそうむやみに動かせるものでもないに。」

「どこかにいい家はないかなあ。」

と言い出すのは三郎だ。すると次郎は私と三郎の間に腰掛けて、

「そう、そう、あの青山の墓地の裏手のところが、まだすこし残ってる。この次ぎにはあそこを歩いて見るんだナ。」

「なにしろ、日あたりがよくて、部屋へやの都合がよくて、庭もあつて、それで安い家と来るんだから、むずかしいや。」と、三郎は混ぜ返すように笑い出した。

「もつと大きい家ならある。」と次郎も私に言ってみせた。「五間か六間といううちようどいいところがない。これはと思うような家があつても、そういうところはみんな人が住んでいてネ。」

「とうさん、五間で四十円なんて、こんな安い家をさがそうたつて無理だよ。」

「そりや、ここの家は例外サ。」と、私は言った。「まあ、ゆっくりさがすんだナ。」

「なにも追い立てをくつてゐるわけじゃないんだから——ここにいたつて、いられないことはないんだから。」

こう次郎も兄にいさんらしいところを見せた。

やがて自分らの移つて行く日が来るとしたら、どんな知らない人たちがこの家に移り住

むことか。そんなことがしきりに思われた。庭にある山茶花^{さざんか}でも、つつじでも、なんと私が植え替えて手入れをしたものかshれない。暇さえあれば箒^{ほうき}を手にして、自分の友だちのようにそれらの木を見に行ったり、落ち葉を掃いたりした。過ぐる七年の間のことは、その土にもこの石にもいろいろな痕跡^{こんせき}を残していた。

いつのまにか末子は黒板の前を離れて、霜どけのしている庭へ降りて行つた。

「次郎ちゃん、芍薬^{しゃくやく}の芽が延びてよ。」

末子は庭にいながら呼んだ。

「薦^{つた}の芽も出て来たわ。」

と、また石垣^{いしがき}の近くで末子の呼ぶ声も起こつた。

遠い山地のほうにできかけている新しい家が、別にこの私たちに見えて来た。こんな落ちつかない気持ちで今の住居^{すまい}に暮らしているうちにも、そのうわさが私たちの間に出ない日はなかった。私は郷里のほうに売り物に出た一軒の農家を太郎のために買い取つたからである。それを峠の上から村の中央にある私たちの旧家の跡に移し、前の年あたりから大工を入れ、新しい工事を始めさせていた。太郎もすでに四年の耕作の見習いを終わり、雇

い入れた一人の婆ひとりばあやを相手にまだ工事中の新しい家のほうに移ったと知らせて来た。彼もどうやら若い農夫として立つて行けそうに見えて来た。

いったい、私が太郎を田舎いなかに送つたのは、もつとあの子を強くしたいと考えたからで。土に親しむようになってからの太郎は、だんだん自分の思うような人になって行つた。それでも私は遠く離れている子の上を案じ暮らして、自分が病氣している間にも一日もあの山地のほうに働いている太郎のことを忘れなかった。郷里のほうから来るたよりはどれほどこの私を励ましたろう。私はまた次郎や三郎や末子と共に、どれほどそれを読むのを楽しみにしたろう。そういう私はいまだに都会の借家かきずまいで、四畳半の書齋でも事は足りると思ひながら、自分の子のために永住の家を建てようとすることは、われながら矛盾した行為だと考えたこともある。けれども、これから新規に百姓生活にはいつて行こうとする子には、寝る場所、物食う炉いろばた、土を耕す農具の類からして求めてあてがわねばならなかった。

私の四畳半に置く机の抽斗ひきだしの中には、太郎から来た手紙やはがきがしまつてある。その中には、もう麦を蒔まいたとしたのもある。工事中の家に移つて障子を張り唐紙からかみを入れてみたら、まるで別の家のように見えて来たとしたのもある。これが自分の家かと思う

と、なんだか恐ろしいようないやな気がして来たとしたのもある。だれに気兼ねもなく、新しい木の香のする炉ばたにあぐらをかいて、飯をやっているところだとしたのもある。

ふとしたことから、私は手にしたある雑誌の中に、この遠く離れている子の心を見つけた。それには父を思う心が寄せてあつて、いろいろなことがこまごまと書きつけてあつた。四人の兄きょうだい妹いの中での長男として、自分はいちばん長く父のそばにいて見たから、それだけ親しみを感ずる心も深いとしたところがあり、それからまた、父の勧農によつて自分もその気になり、今では鋤くわを手にして田園の自然を楽しむ身であるが、四年の月日もむなしく過ぎて行つた、これからの自分は新しい家にて新しい生活を始めねばならない、時には自分は土を相手に戦いながら父のことを思つて涙ぐむことがあるとしたところもあり、その中にはまた、父もこの家を見ることを楽しみにして郷里の土を踏むような日もやがて来るだろう、寺の鐘は父の健康を祈るかのように、山に沈む夕日は何かの深い暗示を自分に投げ与えるように消えて行くとしてあつたのを覚えている。

最近に、また私は太郎からのはがきを受け取つていた。それによつて私はあの山地のほかにできかけている農家の工事が風呂場ふろばを造るほどはかどつたことを知つた。なんとなく

鑿^{のみ}や槌^{つち}の音の聞こえて来るような氣もした。こんなに私にも氣分のいい日が続いて行くようであつたら、おりを見て、あの新しい家を見に行きたいと思う心が動いた。

長いこと私は友だちも訪^{たず}ねない。日がな一日寂^{せき}寞^{ぼく}に閉^とざされる思いをして部屋^{へや}の黄色い壁も慰^{なぐさ}みの一つにながめ暮^くらすようなことは、私に取^とつてきように始^{はじ}まつたことでもない。母親のない幼い子供らをひかえるようになってから、三年もたつうちに、私はすでに同じ思いに行き詰^とまつてしまつた。しかし、そのころの私はまだ四十二の男^{やうどし}の厄^{やく}年^{ねん}を迎^{むか}えたばかりだつた。重い病も、老年の孤独というものも知らなかつた。このまますわつてしまふのかと思うような、そんな恐^{おそ}ろしさはもとより知らなかつた。「みんな、そうですよ。子供が大きくなる時分には、わがからだがきかなくなりますよ。」と、私に言^いつてみせたある婆^{ばあ}さんもある。あんな言葉を思い出して見るのも堪^たえがたかつた。

「とうさん、どこへ行くの。」

ちよつと私が屋^や外^{そと}へ出るにも、そう言^いつて声^{こゑ}を掛^かけるのが次郎^{じらう}の癖^{くせ}だ。植木坂の下あたりに、きまりでそのへんの門のわきに立ち話^わする次郎^{じらう}の旧^{ふる}い遊^{あそ}び友^{とも}だちを見^みいだす。ある若^わ者は青山師範^{しはん}へ。ある若^わ者は海軍兵学校^{かいぐんへいがく}へ。七年の月日は私の子供を変^かえたばかりで

なく、子供の友だちをも変えた。

居住者として町をながめるのもその春かぎりだろうか、そんな心持ちで私は鼠坂ねずみざかのほうへと歩いた。毎年のように椿つばきの花をつける静かな坂道がそこにある。そこにはもう春がやって来ているようにも見える。

私の足はあまり遠くへ向かわなかった。病氣以来、ことにそうだった。何か特別の用事でもないかぎり、私は樹木の多いこの町の界隈かいわいを歩き回るだけに満足した。そして、散歩の途中でも家のことが気にかかつて来るのが私の癖のようになってしまった。「とうさん、僕たちが留守居するよ。」と、次郎なぞが言ってくれる日を迎えても、ただただ私の足は家の周囲を回りに回った。あらゆる嵐あらしから自分の子供を護まもろうとした七年前と同じように。

「旦那だんなさん。もうお帰りですか。」

と言つて、下女のお徳がこの私を玄関のところに迎えた。お徳の白い割烹着かつぽうぎも、見慣れるうちにそうおかしくなくなつた。

「次郎ちゃんは？」

「お二階で御勉強でしょう。」

それを聞いてから、私は両手に持てるだけ持っていた袋包みをどつかとお徳の前に置いた。

「きようはみんなの三時にと思つて、林檎りんごを買つて来た。ついでに菓子も買つて来た。」

「旦那さんのように、いろいろなものを買つて提さげていらつしやるかたもない。」

「そう言えば、鼠ねずみ坂みさかの椿つばきが咲いていたよ。今にもうおれの家の庭へも春がやつて来るよ。」

そんな話をして置いて、私は自分の部屋へやへ行つた。

私の心はなんとなく静かでなかった。実は私は次郎の将来を考えたあげく、太郎に勧めたとは別の意味で郷里に帰ることを次郎にも勧めたいと思いついたからで。長いこと養つて来た小鳥の巢から順に一羽ずつ放してやつてもいいような、そういう日がすでに来ているようにも思えた。しかし私も、それを言い出してみるまでは落ちつかなかった。

ちようど、三郎は研究所へ、末子は学校へ、二人とも出かけて行つてまだ帰らなかった時だった。次郎はもはや毎日の研究所通いでもあるまいというふうで、しばらく家にこもつていて描かき上げた一枚の油絵を手にしながら、それを私に見せに二階から降りて来た。いつでも次郎が私のところへ習作を持つて来て見せるのは弟のいない時で、三郎がまた見

せに来るのは兄のいない時だった。

「どうも光っていけない。」

と言いながら、その時次郎は私の四畳半の壁のそばにたてかけた画を本棚の前に置き替えて見せた。兄の描いた妹の半身像だ。

「へえ、末ちゃんだね。」

と、私も言つて、しばらく次郎と二人してその習作に見入っていた。

「あの三ちゃんが見たら、なんと言うだろう。」

その考えが苦しく私の胸へ来た。二人の兄弟の子供が決して互いの画を見せ合わないことを私はもうちゃんとよく知っていた。二人はこんな出発点のそもそもから全く別のももの持つて生まれて来た画家の卵のようにも見えた。

次郎は画作に苦しみ疲れたような顔つきで、癖のように爪をかみながら、

「どうも、糞正直にばかりやつてもいけないと思つて来た。」

「お前のはあんまり物を見つめ過ぎるんだろう。」

「どうだろう、この手はすこし堅過ぎるかね。」

「そんなことをとうさんに相談したって困るよ。とうさんは、お前、素人じゃないか。」

その日は私はわざと素気ない返事をした。これが平素なら、私は子供と一緒に、なんとか言ってみるところだ。それほど実は私も画が好きだ。しかし私は自分の畠にもない素人評が実際子供の励ましになるのかどうか、それにすら迷った。ともあれ、次郎の言うことには、たようとうとするあわれさがあつた。

次郎の作つた画を前に置いて、私は自分の内に深く突き入った。そこにわが子を見た。なんとなく次郎の求めているような素朴さは、私自身の求めているものでもある。最後からでも歩いて行こうとしているような、ゆつくりとおそい次郎の歩みは、私自身の踏もうとしている道でもある。三郎はまた三郎で、画面の上に物の奥行きなどを無視し、明快に明快にと進んで行っているほうで、きのう自分の描いたものをきようは旧いとするほどの変わり方だが、あの子のように新しいものを求めて熱狂するような心もまた私自身の内に潜んでいないでもない。父の矛盾は覲面に子に來た。兄弟であつて、同時に競争者——それは二人の子供に取つて避けがたいことのように見えた。なるべく思い思いの道を取らせたい。その意味から言つても、私は二人の子供を引き離したかつた。

「次郎ちゃん、おもしろい話があるんだが、お前はそれを聞いてくれるか。」
そんなことから切り出して、私はそれまで言い出さずにいた田舎行き話を次郎の前に

持ち出してみた。

「半農半画家の生活もおもしろいじゃないか。」と、私は言った。「午前は自分の画^えをかいて、午後から太郎さんの仕事を助けたつてもいいじゃないか。田舎で教員しながら画^えをかくなんて人もあるが、ほんとうに百姓しながらやるという画家は少ない。そこまで腰^す据えてかかってごらん、一家を成せるかもしれない。まあ、二三年は旅だと思って出かけて行ってみてはどうだね。」

日ごろ田舎^{いなか}の好きな次郎ででもなかったら、私もこんなことを勧めはしなかった。

「できるだけとうさんも、お前を助けるよ。」と、また私は言った。「そのかわり、太郎さんと二人で働くんだぜ。」

「僕もよく考えてみよう。こうして東京にぐずぐずしていたつてもしかたがない。」

と、次郎は沈思するように答えて、ややしばらく物も言わずに、私のそばを離れずにいた。

四月にはいつて、私は郷里のほうに太郎の新しい家を見に行く心じたくを始めていた。いよいよ次郎も私の勧めをいれ、都会を去ろうとする決心がついたので、この子を郷里へ

送る前に、私は一足先に出かけて行つて来たいと思った。留守中のことは次郎に預けて行きたいと思う心もあった。日ごろ家にばかり引きこもりがちの私が、こんな気分のいい日を迎えたことは、家のものをよろこばせた。

「ちよつと三人で、じゃんけんしてみておくれ。」

と、私は自分の部屋^{へや}から声を掛けた。気候はまだ春の寒さを繰り返していたころなので、子供らは茶の間の火鉢^{ひばち}の周囲に集まっていた。

「オイ、じゃんけんだとよ。」

何かよい事でも期待するように、次郎は弟や妹を催促した。火鉢の周囲には三人の笑い声が起こった。

「だれだい、負けた人は。」

「僕だ。」と答えるのは三郎だ。「じゃんけんというと、いつでも僕が貧乏くじだ。」

「さあ、負けた人は、郵便箱を見て来て。」と、私が言った。「もう太郎さんからなんとか言つて来てもいいころだ。」

「なあんだ、郵便か。」

と、三郎は頭をかきかき、古い時計のかかった柱から鍵^{かぎ}をはずして路地^{ろじ}の石段の上まで

見に出かけた。

郷里のほうからのたよりがそれほど待たれる時であつた。この旅には私は末子を連れて行こうとしていたばかりでなく、青山の親しんせき戚あによめめいが嫂あによめめいに姪あによめめいの子供に三人までも同行したいという相談を受けていたので、いろいろ打ち合わせをして置く必要もあつたからで。待ち受けた太郎からののがきを受け取つて見ると、四月の十五日ごろに来てくれるのがいちばん都合がいい、それより早過ぎてもおそ過ぎてもいけない、まだ壁の上うわぬ塗りもすつかりできていないし、月の末になるとまた農家はいそがしくなるからとしてあつた。

「次郎ちゃん、とうさんが行つて太郎さんともよく相談して来るよ。それまでお前は東京に待つておいで。」

「太郎さんのところからも賛成だと言つて来ている。ほんとに僕がその気なら、一緒にやりたいと言つて来ている。」

「そうサ。お前が行けば太郎さんも心強かろうからナ。」

私は次郎とこんな言葉をかわした。

久しぶりで郷里を見に行く私は、みやげ物をあつめに銀座へんを歩き回つて来るだけでも、額ひたいから汗の出る思いをした。暮れからずっと続けている薬を旅の鞆かばんに納めることも忘

れてはならなかった。私は同伴する人たちのことを思い、ようやく回復したばかりのような自分の健康のことも気づかれて、途中下諏訪しもすわの宿屋あたりで疲れを休めて行こうと考えた。やがて、四月の十三日という日が来た。いざ旅となれば、私も遠い外国を遍歴して来たことのある気軽な自分に帰った。古い鞆かぼんも、古い洋服も、まだそのまま役に立った。連れて行く娘のしたくもできた。そこで出かけた。

この旅には私はいろいろな望みを掛けて行つた。長いしたくと親子の協力とからできたような新しい農家を見る事もその一つであつた。七年の月日の間に数えるほどしか離れてなかつた今の住居すまいから離れ、あの恵那山えなの見えるような静かな田舎いなかに身を置いて、深いため息でも吐ついて来たいと思う事もその一つであつた。私のそばには、三十年ぶりで郷里を見に行くという年老いた嫂あによめもいた。姪めいが連れていたのはまだ乳離ちばなれもしないほどの男の子であつたが、すぐに末子に慣れて、汽車の中で抱かれたりその膝ひざに乗ったりした。それほど私の娘も子供好きだ。その子は時々末子のそばを離れて、母のふところをさぐりに行つた。

「叔父さんおじ、ごめんなさいよ。」

と言つて、姪めいは幾人もの子供を生んだことのある乳房ちちぐさを小さなものにふくませながら話

した。そんなにこの人は氣の置けない道づれだ。

「そう言えば、太郎さんの家でも、屋号をつけたよ。」と、私は姪に言ってみせた。「みんなで相談して田舎風いなかに『よもぎや』とつけた。それを『蓬屋』と書いたものか、『四方木屋』と書いたものかと言うんで、いろいろな説が出たよ。」

「そりや、『蓬屋』と書くよりも、『四方木屋』と書いたほうがおもしろいでしょう。いかにも山家やまがらしくて。」

こんな話も旅らしかった。

甲府こうふまで乗り、富士見ふじみまで乗って行くうちに、私たちは山の上に残っている激しい冬を感じて来た。下諏訪しもすわの宿へ行つて日が暮れた時は、私は連れのために真綿まわたを取り寄せて着せ、またあくる日の旅を続けようと思うほど寒かった。——それを嫂あによめにも着せ、姪にも着せ、末子にも着せて。

中央線の落合川おちあいがわ駅まで出迎えた太郎は、村の人たちと一緒に、この私たちを待っていた。木曾路きそじに残った冬も三留野みどのあたりまでで、それから西はすでに花のさかりであつた。水力電気の工事でせき留められた木曾川の水が大きな溪たにの間に見えるようなところで、私はカルサン姿の太郎と一緒にすることができた。そこまで行くと次郎たちの留守居する東

京のほうの空も遠かった。

「ようやく来た。」

と、私はそれを太郎にも末子にも言ってみせた。

年とつたあによめ嫁だけは山やま駕籠、その他のものは皆徒歩で、それから一里ばかりある静かな山

路まみちを登った。路傍に咲く山つつじでも、堇すみれでも、都会育ちの末子を楽しませた。登れば

登るほど青く澄んだ山の空気が私たちの身に感じられて来た。旧い街道の跡が一筋目につ

くところまで進んで行くと、そこはもう私の郷里の入り口だ。途中で私は森もりさんという人

の出迎えに来てくれるのにあつた。森さんは太郎より七八歳ほども年長な友だちで、太郎

が四年の農事見習いから新築の家の工事まで、ほとんどいっさいの世話をしてくれたのも

この人だ。

郷里に帰るものの習いで、私は村の人たちや子供たちの物見高い目を避けたかった。今

だに古い駅路うまやじのなごりを見せているような坂の上のほうからは、片側に続く家々の前に

添うて、細い水の流れが走って来ている。勝手を知った私はある抜け道を取って、ちよう

どその村の裏側へ出た。太郎は私のすぐあとから、すこしおくれて姪や末子もついて来た。

私は太郎の耕しに行く畠はたけがどっちの方角に当たるかを尋ねることすら楽しみに思いながら

歩いた。私の行く先にあるものは幼い日の記憶をよび起こすようなものばかりだ。暗い竹藪けやぶのかげの細道について、左手に小高い石垣いしがきの下へ出ると、新しい二階建ての家のがつしりとした側面が私の目に映った。新しい壁も光って見えた。思わず私は太郎を顧みて、

「太郎さん、お前の家かい。」

「これが僕の家サ。」

やがて私はその石垣いしがきを曲がって、太郎自身の筆で屋号を書いた農家風の入り口の押し戸よもぎやの前に行つて立つた。

四方木屋。

太郎には私は自身に作れるだけの田と、畑と、薪材まきざいを取りに行くために要いだけの林と、それに家とをあてがった。自作農として出発させたい考えで、余分なものはいっさいあてがわない方針を執った。

都会の借家ずまいに慣れた目で、この太郎の家を見ると、新規に造った炉ばたからしてめずらしく、表から裏口へ通り抜けられる農家風の土間もめずらしかった。奥もかなり広くて、青山の親戚しんせきを泊めるには充分であつたが、おとなから子供まで入れて五人もの客

が一時にそこへ着いた時は、いかにもまだ新世帯らしい思いをさせた。

「きのうまで左官屋さんはいつていた。庭なぞはまだちつとも手がつけてない。」
と、太郎は私に言ってみせた。

何もかも新規だ。まだ柱時計一つかかっていない炉ばたには、太郎の家で雇っているお霜婆さんのほかに、近くに住むお菊婆さんも手伝いに来てくれ、森さんの母さんまで来てわが子の世話でもするように働いていてくれた。

私は太郎と二人で部屋部屋を見て回るような時を見つけようとした。それが容易に見当たらなかった。

「この家は気に入った。思つたよりいい家だ。よつほど森さんにはお礼を言ってもいいね。」

わずかにこんな話をしたかと思うと、また太郎はいそがしそうに私のそばから離れて行った。そこいらには、まだかわき切らない壁へよせて、私たちの荷物が取り散らしてある。末子は姪の子供を連れながら部屋部屋をあちこちとめずらしそうに歩き回っている。嫂も三十年ぶりでの帰省とあつて、旧なじみの人たちが出たりはいたりするだけでも、かなりごたごたした。

人を避けて、私は眺望^{ちようぼう}のいい二階へ上がって見た。石を載せた板屋根、ところどころに咲きみだれた花の梢^{こずえ}、その向こうには春深く霞^{かす}んだ美濃^{みの}の平野が遠く見渡される。天氣のいい日には近江^{おうみ}の伊吹山^{いぶきやま}までかすかに見えるということを私は幼年のころに自分の父からよく聞かされたものだが、かつてその父の旧^{ふる}い家から望んだ山々を今は自分の新しい家から望んだ。

私はその二階へ上がって来た森さんとも一緒に、しばらく窓のそばに立って、久しぶりで自分を迎えてくれるような恵^え那山^なにもながめ入った。あそこに深い谷がある、あそこに遠い高原がある、とその窓から指^さして言うことができた。

「おかげで、いい家ができました。太郎さんにくれるのは惜しいような気がして来ました。これまでに世話してくださるのも、なかなか容易じゃありません。私もまた、時々本でも読みに帰ります。」

と、私は森さんに話したが、礼の心は言葉にも尽くせなかった。

翌日^{あによめ}になっても、私は太郎と二人^{ふたり}ぎりでゆっくり話すような機会を見いださなかった。嫂^{あによめ}の墓参に。そのお供に。入れかわり立ちかわり訪^{たず}ねて来る村の人たちの応接に。午後、また私は人を避けて、炉^ろばたつづきの六畳ばかりの部屋^{へや}に太郎を見つけた。

「とうさん、みやげはこれっきり？」

「なんだい、これっきりとは。」

私は約束の柱時計を太郎のところへ提^さげて来られなかった。それを太郎が催促したのだ。「次郎ちゃんが来る時に、時計は持たしてよこす。」と言ったあとで、ようやく私は次郎のことをそこへ持ち出した。「どうだろう、次郎ちゃんは来たいと言ってるが、お前の迷惑になるようなことはなからうか。」

「そんなことはない。あのとおり二階はあいているし、次郎ちゃんの部屋はあるし、僕はもうそのつもりにして待っているところだ。」

「半日お前の手伝いをさせる、半日画^えをかかせる——そんなふうにしてやらしてみるか。何も試みだ。」

「まあ、最初の一年ぐらいは、僕から言えばかえって邪魔になるくらいなものだろうけれど——そのうちには次郎ちゃんも慣れるだろう。なかなか百姓もむずかしいからね。」

そういう太郎の手は、指の骨のふしぶしが強くあらわれていて、どんな荒仕事にも耐えられそうに見えた。その手はもはやいっぱしの若い百姓の手だった。この子の机のそばには、本箱なども置いてあって、農民と農村に関する書籍の入れているのも私の目についた。

その日は私は新しい木の香のする風呂桶ふろおけに身を浸して、わずかに旅の疲れを忘れた。私は山家やまがらしい炬たきばたで婆ばあさんたちの話も聞いてみたかった。で、その晩はあかあかとした焚火たきびのほてりが自分の顔へ来るところへ行つて、くつろいだ。

「ほんとに、おらのようなものの造るものでも、太郎さんはうまいうまいと言つて食べさせろ。そう思うと、おらはオヤゲナイような気がする。」

と、私に言つてみせるのは、肥ふとつて丈夫そうなお霜婆さんだ。私の郷里では、このお霜婆さんの話するように、女でも「おら」だ。

「どうだなし、こない家ができたら、お前さまもうれしからず。」

と、今度はお菊婆さんが言い出した。無口なお霜婆さんに比べると、この人はよく話した。

「今度帰つて見て、私も安心しました。」と、私は言つた。「私はあの太郎さんを旦那だんな衆ゆうにするつもりはありません。要いるだけの道具はあてがう、あとは自分で働け——そのつもりです。」

「えゝ、太郎さんもその氣だで。」と、お菊婆さんは炬たきの火のほうに気をくぼりながら言つた。「この焚木たきぎでもなんでも、みんな自分で山から背負しょつておいでるぞなし。そりや、

お前さま、この家を建てるだけでも、どのくらいよく働いたかしれずか。」

炬ばたでの話は尽きなかった。

みつか

あによめ

ふる

よもぎや

かあ

三日目には私は嫂のために旧いなじみの人を四方木屋の二階に集めて、森さんのお母さんやお菊婆さんの手料理で、みんなと一緒に久しぶりの酒でもくみかわしたいと思った。

三年前に兄を見送つてからの嫂は、

あによめ

ふ

に取つての郷里の見納めであろうとも思われたからで。

私たちは炬ばたにいて順にそこへ集まつて来る客を待った。嫂が旧いなじみの人々で、

三十年の昔を語り合おうとするような男の老人はもはやこの村にはいなかった。そういう

かが

老人という老人はほとんど死に絶えた。招かれて来るお客はお婆さんばかりで、腰を曲め

ながらはいって来る人のあとには、すこし耳も遠くなったという人の顔も見えた。隣村か

らわざわぎ嫂や姪や私の娘を見にやって来てくれた人もあつたが、私と同年ですでに幾人

かの孫のあるという未亡人が、その日の客の中での年少者であつた。

しかし、一同が二階に集まつて見ると、このお婆さんたちの元気のいい話し声がまた私

をびつくりさせた。その中でも、一番の高齢者で、いちばん元気よく見えるのは隣家のお

婆さんであつた。この人は酒の盃を前に置いて、

さかづき

「どうか、まあ太郎さんにもよいおよめさんを見つけてあげたいもんだ。とうさんの御心配で、こうして家もできたし。この次ぎは、およめさんだ。そのおりには私もまたきょうのように呼んでいただきたい——私は私だけのお祝いを申し上げに來たい。」

八十歳あまりになる人の顔にはまだみずみずしい光沢があつた。私はこの隣家のお婆さんの孫にあたる子息や、森さんなぞと一緒に同じ食卓についていて、日ごろはめつたにやらない酒をすこしばかりやつた。太郎はまたこの新築した二階の部屋で初めての客をするという顔つきで、冷めた徳利を集めたり、それを熱燗に取り替えて來たりして、二階と階下の間を往たり來たりした。

「太郎さんも、そこへおすわり。」と、私は言った。「森さんのおかあさんが丹精してくだすつたごちそうもある——下諏訪の宿屋からとうさんの提げて來た若鷺もある——」「こういう田舎にいますと、酒をやるようになります。」と、森さんが、私に言ってみせた。「どうしても、周囲がそうだもんですから。」

「太郎さんもすこしは飲めるように、なりましたらうか。」と、私は半分串談のよう
に。

「えゝ、太郎さんは強い。」それが森さんの返事だった。「いくら飲んでも太郎さんの酔

つたところを見た事がない。」

その時、私は森さんから返った盃さかずきを太郎の前に置いて、

「今から酒はすこし早過ぎるぜ。しかし、きようは特別だ。まあ、一杯やれ。」

わが子の労苦をねぎらおうとする心から、思わず私は自分で徳利を持ち添えて勧めた。

若者、万歳——口にこそそれを出さなかったが、青春を祝する私の心はその盃にあふれた。私は自分の年とつたことも忘れて、いろいろと皆を款待もてなし顔な太郎の酒をしばらくそこにながめていた。

七日の後には私は青山の親戚しんせきや末子と共にこの山を降りた。

落合川の駅からもと来た道を汽車で帰ると、下諏訪しもすわへ行つて日が暮れた。私は太郎の作っている桑畑や麦畑を見ることもかなわなかったほど、いそがしい日を郷里のほうで送り続けて来た。察しのすくない郷里の人たちは思うように私を休ませてくれなかった。この帰りには、いったん下諏訪で下車して次の汽車の来るのを待ち、また夜行の旅を続けたが、嫂あによめでも姪めいでも言葉すくなに乗って行つた。末子などは汽車の窓のところにハンケチを載せて、ただうとうとと眠りつづけて行つた。

東京の朝も見直すような心持ちで、私は娘と一緒に家に帰りついた。私も激しい疲れの出るのを覚えて、部屋へやの畳の上にごろごろしながら寝てばかりいるような自分を留守居するもののそばに見つけた。

「旦那だんなさん、あちらはいかがでした。」

と、お徳が熱い茶なぞを持って来てくれると、私は太郎が山から背負しょって来たという木で焚たいた炉にもあたり、それで沸かした風呂ふろにもはいって来た話なぞをして、そこへ横になつた。

「とうさん、どうだった。」

「思ったより太郎さんの家はいい家だったよ。しっかりとできていたよ。でも、ぜいたくな感じはすこしもなかった。森さんの寄付してくれた古い小屋なぞも裏のほうに造り足してあつたよ。」

私は次郎や三郎にもこんな話を聞かせて置いて、またそこに横になつた。

ふっか
みっか

二日も三日も私は寝てばかりいた。まだ半分あの山の上に身を置くような気もしていた。旅の印象は疲れた頭に残つて、容易に私から離れなかった。私の目には明るい静かな部屋がある。新しい障子のそばには火鉢ひばちが置いてある。客が来てそこで話し込んでいる。村の

校長さんという人も見えていて「太郎さんの百姓姿をまだ御覧になりませんか、なかなかようござんすよ。」と、私に言つてみせたことを思い出した。「おもしろい話もあります。太郎さんがまだ笹刈りにも慣れない時分のことです。笹刈りと言えはこの土地でも骨の折れる仕事ですからね。あの笹刈りがあるために、他からこの土地へおよめに来手がないと
言われるくらい骨の折れる仕事ですからね。太郎さんもみんなと一緒に、威勢よくその笹刈りに出かけて行つたはよかつたが、腰をさがして見ると、鎌を忘れた。大笑いしましたよ。それでも村の若い者がみんなで寄つて、太郎さんに刈つてあげたそうですがね。どうして、この節の太郎さんはもうそんなことはありません。」と、その校長さんの言つたことを思い出した。そう言えば、あの村の二三の家の軒先に刈り乾してあつた笹の葉はまだ私の目にある。あれを刈りに行くものは、腰に火縄を提げ、それを蚊遣りの代わりとし、襲い来る無数の藪蚊と戦いながら、高い崖の上に生えているのを下から刈り取つて来るといふ。あれは熊笹というやつか。見たばかりでも恐ろしげに、幅広で鋭くどがつたあの笹の葉は忘れ難い。私はまた、水に乏しいあの山の上で、遠いわが家の先祖ののこした古い井戸の水が太郎の家に活き返つていたことを思い出した。新しい木の香のする風呂桶に身を浸した時の楽しさを思い出した。ほんとうに自分の子の家に帰つたような気のしたの

も、そういう時であつたことを思い出した。

しかし、こういう旅疲れも自然とぬけて行つた。そして、そこから私が身を起こしたころには、過ぐる七年の間続きに続いて来たような寂しい嵐あらしの跡を見直そうとする心を起こした。こんな心持ちは、あの太郎の家を見るまでは私に起こらなかったことだ。

留守宅には種々な用事が私を待つていた。その中でも、さしあたり次郎たちと相談しなければならぬ事が二つあつた。一つは見つかつたという借家の事だ。さつそく私は次郎と三郎の二人ふたりを連れて青山方面まで見に行つて来た。今少して約束するところまで行つた。見合わせた。歸つて来て、そんな家を無理して借りるよりも、まだしも今の住居すまいのほうがましだということにおもひ当たつた。いったんは私の心も今の住居すまいを捨てたものである。しかし、もう一度この屋根の下に辛抱しんぼうしてみようと思う心はすでにその時に私のうちにきざして来た。

今一つは、次郎の事だ。私は太郎から聞いて来た返事を次郎に伝えて、いよいよ郷里のほうへ出発するように、そのしたくに取り掛からせることにした。

「次郎ちゃん、番町ばんちょうの先生のところへも暇乞いとまごに行つて来るがいいぜ。」

「そうだよ。」

私たちはこんな言葉をかわすようになった。「番町の先生」とは、私より年下の友だちで、日ごろ次郎のような未熟なものでも末たのもしく思つて見ていてくれる美術家である。「今ある展覧会も、できるだけ見て行くがいいぜ。」

「そうだよ。」

と、また次郎が答えた。

五月にはいつて、次郎は半分引つ越しのような騒ぎを始めた。何かごとと言わせて戸^と棚^{だな}を片づける音、画架や額^{がくぶち}縁^{えり}を荷造りする音、二階の部屋を歩き回る音などが、毎日のように私の頭の上でした。私も階下の四畳半にいてその音を聞きながら、七年の古巣からこの子を送り出すまでは、心も落ちつかなかった。仕事の^{じょうず}上手なお徳は次郎のために、郷里のほうへ行つてから着るものなぞを縫った。裁縫の材料、材料で次ぎから次ぎへと追^あわれている末子が学校でのけいこに縫った太郎の^{あわせばおり}袷^{あわせ}羽織^{はおり}もそこへでき上がった。それを柳行李^{やなぎごうり}につめさせてなどと家のものが語り合うのも、なんとなく若者の旅立ちの前らしかった。

次郎の田舎^{いなか}行きは、よく三郎の話にも上^のつた。三郎は研究所から帰つて来るたびに、その話を私にして、

「次郎ちゃんのは、研究所でもみんな知ってるよ。僕の友だちが聞いて『それだけの決心がついたのは、えらい』——とサ。しかし僕は田舎へ行く気にならないなあ。」

「お前はお前、次郎ちゃんは次郎ちゃんでもいい。広い芸術の世界だもの——みんながみんな、そう同じような道を踏まなくてもいい。」

と、私は答えた。

子供の変わつて行くにも驚く。三郎も私に向かつて、以前のように感情を隠さなくなつた。めまぐるしく動いてやまないような三郎にも、なんとなく落ちついたところが見えて来た。子供の変わるのはおとなの移り気とは違う、子供は常に新しい——そう私に思わせるのもこの三郎だ。

やがて次郎は番町の先生の家へも暇いとまぎ乞いに寄つたと言つて、改まつた顔つきで帰つて来た。餞せんべつ別のしるしに贈られたという二枚の書をも私の前に取り出して見せた。それはみごとに筆で大きく書いてあつて、あの四方木屋よもぎやの壁にでも掛けてながめ楽しむにふさわしいものだった。

「とうさん、番町の先生はそう言つたよ。いろいろな人の例を僕に引いてみせてね、田舎いなかへ引つ込んでしまうと画えがかけなくなるとサ。」

と、次郎はやや不安らしく言つたあとで、さらに言葉を継いで、

「それから、こういうものをくれてよこした。田舎いなかへ行つたら読んでごらんさいと言つて僕にくれてよこした。何かと思つたら、『扶桑陰逸伝ふそういんいつでん』サ。画えの本でもくれればいいのに、こんな仙人せんじんの本サ。」

「仙人の本はよかつた。」と、私も吹き出した。

「これはとうさんでも読むにちよいどいい。」

「とうさんだつて、まだ仙人には早いよ。」

「しかしお餞別せんべつと思えばありがたい。きようは番町でいろいろな話が出たよ。ヴィルドラックという人の持つて来たマチスの画えの話も出たよ。きようの話はみんなよかつた。それから先生の奥さんも、御飯を一緒に食べて行けと言つてしきりに勧めてくださつたが、僕は歸つて来た。」

先輩の一言一行も忘れられないかのように、次郎はそれを私に語つてみせた。

いよいよ次郎の家を離れて行く日も近づいた。次郎はその日を茶の間の縁先にある黒板の上に記しるしつけて見て、なんとなくなごりが惜しまるというふうであつた。やがて、荷造りまでもできた。この都会から田舎へ歸つて行く子を送る前の一日だけが残つた。

「どっこいしょ。」

私がそれをやるのに不思議はないが、まだ若いさかりのお徳がそれを使った。お徳も私の家に長く奉公しているうちに、そんなことが自然と口に出るほど、いつのまにか私の癖に染まったと見える。

このお徳は茶の間と台所の間を往ったり来たりして、次郎の「送別会」のしたくを始めた。そういうお徳自身も遠からず暇を取って、代わりの女中のあり次第に国もとのほうへ帰ろうとしていた。

「旦那さん、お肴屋さんがまいりました。旦那さんの分だけ何か取りましようか。次郎ちゃんたちはライス・カレエがいいそうですよ。」

「ライス・カレエの送別会か。どうしてあんなものがそう好きなんだろうなあ。」

「だって、皆さんがそうおっしゃるんですもの。——三ちゃんでも、末子さんでも。」

私はお徳の前に立つて、肴屋の持つて来た付木にいそがしく目を通した。それには河岸から買って来た魚の名が並べ記してある。長い月日の間、私はこんな主婦の役をも兼ねて来て、好ききらいの多い子供らのために毎日の総菜を考えることも日課の一つのようになつていた。

「待てよ。おれはどうでもいいが、送別会のおつきあいあゆに鯰いっぴきの一尾ももらつて置くか。」
と、私はお徳に話した。

「末ちゃん、おまいか。」

と、私はまた小さな娘にでも注意するように末子に言つて、白の前掛けをかけさせ、その日の台所を手伝わせることも忘れなかつた。

「ほんとに、太郎さんのようなおとなしい人のおよめさんになるものは仕合わせだ。わたしもこれでもつと年でも取つてると——もつとお婆ばあさんだと——台所の手伝いにでも行つてあげるんだけれど。」

それが茶の間に来てのお徳の述懐だ。

茶の間には古い柱時計のほかに、次郎が銀座まで行つて買つて来た新しいのも壁の上に掛けてあつた。太郎への約束の柱時計だ。今度次郎が提さげて行こうとするものだ。それが古い時計と並んで一緒に動きはじめていた。

「すごい時計だ。」

と、見に来て言うものがある。そろそろ夕飯のしたくができるころには、私たちは茶の間に集まつて新しい時計の形をいろいろに言つてみたり、それを古いほうに比べたりした。

私の四人の子供がまだ生まれない前からあるのも、その古いほうの時計だ。

やがて私たちは一緒に食卓についた。次郎は三郎とむかい合い、私は末子とむかい合った。

「送別会」とは名ばかりのような粗末な食事でも、こうして三人の兄きょうだい妹の顔がそろうのはまたいつのことかと思わせた。

「いよいよ明日あすは次郎ちゃんも出かけるかね。」と、私は古い柱時計を見ながら言った。

「かあさんが亡なくなってから、ことしでもう十七年にもなるよ。あのおかあさんが生きていて、お前たちの話す言葉を聞いたら驚くだろうなあ。わざと乱暴な言葉を使う。『時計を買いやがった——動いていやがらあ——お前たちのはその調子だもの。』」

「いけねえ、いけねえ。」と、次郎は頭をかきながら食った。

「とうさんがそんなことを言ったって、みんながそうだからしかたがない。」と、三郎も笑いながら食った。

「そう言えば、次郎ちゃんも一年に二度ぐらいずつは東京へ出ておいでよ。なにも田舎いなかに引つ込みきりと考えなくてもいいよ。二三年は旅だと思ってごらん。とうさんなども旅をするたびに自分の道が開けて来た。田舎へ行くと、友だちはすくなくあろうなあ。ことに

画^えのほうの友だちが——それだけがとうさんの気がかりだ。」

こう私が言うと、今まで子供の友だちのようにして暮らして来たお徳も長い奉公を思い出し顔に、

「次郎ちゃんが行ってしまおうと、急にさびしくなりましようねえ。人を送るのもいいが、わたしはあとがいやです。」

と、給^{きゅうじ}仕しながら言った。

「あゝ、食った。食った。」

間もなくその声が子供らの間に起こった。三郎は口をふいて、そこにある箆^{たんす}笥を背に足を投げ出した。次郎は床^{とこばしら}柱のほうへ寄つて、自分で装置したラジオの受話器を耳にあてがった。細いアンテナの線を通して伝わって来る都会の声も、その音楽も、当分は耳にすることのできないかのように。

その晩は、お徳もなごりを惜しむというふうで、台所を片づけてから子供らの相手になった。お徳はにぎやかなことの好きな女で、戯れに子供らから腕押しでも所望されると、いやだとは言わなかった。肥^{ふと}つて丈夫そうなお徳と、やせぎすで力のある次郎とは、おもしろい取り組みを見せた。さかんな笑い声が茶の間で起こるのを聞くと、私も自分の部屋^{へや}

にじつとしていられなかった。

「次郎ちゃんと姉ねいやとは互角ごかくだ。」

そんなことを言つて見ている三郎たちのそばで、また二人は勝負を争つた。健康そのものとも言いたいお徳が肥ふとつた膝ひざを乗り出して、腕に力を入れた時は、次郎もそれをどうすることもできなかった。若々しい血潮は見る見る次郎の顔に上のほつた。堅く組んだ手も震えた。私はまたハラハラしながらそれを見ていた。

「才さい、痛い。御覧なさいな、私の手はこんなに紅あかくなつちやつたこと。」

と、お徳は血でもにじむかと思えるほど紅く熱した腕をさすつた。

「三ちゃんも姉ねいやとやつてごらんなさいな。」

と、末子がそばから勧めたが、三郎は応じなかった。

「僕はよす。左ならやつてみてもいいけれど。」

そういう三郎は左を得意としていた。腕押しに、骨牌かるたに、その晩は笑い声が尽きなかった。

翌日はもはや新しい柱時計が私たちの家の茶の間にかかつていなかった。次郎はそれを厚い紙箱に入れて、旅に提さげて行かれるように荷造りした。

その時になってみると、太郎はあの山地のほうですでに田植えを始めている。次郎はこれから出かけようとしている。お徳もやがては国をさして帰ろうとしている。次郎のいないあとは、にわかにも家も寂しかりうけれど、日ごろせせこましく窮屈にのみ暮らして来た私たちの前途には、いくらかのゆとりのある日も来そうになった。私は私で、もう一度自分の書齋を二階の四畳半に移し、この次ぎは客としての次郎をわが家に迎えようと思うなら、それとできない相談ではないように見えて来た。どうせ今の住居すまいはあの愛宕下あたごしたの宿屋からの延長である。残る二人の子供に不自由さえなくば、そう想おもつてみた。五十円や六十円の家賃で、そう思わしい借家のないこともわかった。次郎の出発を機会に、ようやく私も今の住居すまいに居座りいすわと観念するようになった。

私はひとりで、例の地下室のような四畳半の窓へ近く行つた。そこいらはもうすっかり青葉の世界だった。私は両方こぶしの拳を堅く握りしめ、それをうんと高く延ばし、大きなあくびを一つした。

「大都市は墓地です。人間はそこには生活していません。」

これは日ごろ私の胸を往いつたり来たりする、あるすぐれた芸術家の言葉だ。あの子供らのよく遊びに行つた島津山しまづやまの上から、芝麻布方面しばあぶに連なり続く人家の屋根を望んだ時

のかつての自分の心持ちをも思い合わせ、私はそういう自分自身の立つ位置さえもが——あの芸術家の言い草ではないが、いつのまにか墓地のような気のして来たことを胸に浮かべてみた。過ぐる七年のさびしい嵐は、^{あらし}それほど私の生活を行き詰まったものとした。

私が見直そうと思って来たのも、その墓地だ。そして、その墓地から起き上がる時が、どうやら、自分のようなものにもやって来たかのように思われた。その時になって見ると、「父は父、子は子」でなく、「自分は自分、子供は子供ら」でもなく、ほんとうに「私たち」への道が見えはじめた。

夕日が二階の部屋^{へや}に満ちて来た。階下にある四畳半や茶の間はもう薄暗い。次郎の出発にはまだ間があつたが、まとめた荷物は二階から玄関のところへ運んであつた。

「さあ、これだ、これが僕の持つて行く一番のおみやげだ。」

と、次郎は言つて、すっかり荷ごしらえのできた時計をあちこちと持ち回つた。

「どれ、わたしにも持たせてみて。」

と、末子は兄のそばへ寄つて言つた。

遠い山地も、にわかに私たちには近くなった。この新しい柱時計が四方木屋^{よもぎや}の炬燵^{よもぎ}にばかり音のする日を想いみるだけでも、楽しかった。日ごろ私が矛盾のように自分の行

為を考えたことも、今はその矛盾が矛盾でないような時も来た。子のために建てたあの永住の家と、旅にも等しい自分の仮の借家ずまいの間には、虹にじのような橋がかかったように思われて来た。

「次郎ちゃん、停車場まで送りましょう。末子さんもわたしと一緒にいらつしやいね。」
と、お徳が言い出した。

「僕も送って行くよ。」

と、三郎も言った。すると、次郎は首を振って、

「だれも来ちゃいけない。今度はだれにも送ってもらわない。」

それが次郎の望みらしかった。私は末子やお徳を思いとまらせたが、せめ三郎だけをやって、飯田橋いいたばしの停車場まで見送らせることにした。

やがて、そこいらはすっかり暗くなった。まだ宵よいの口から、家の周囲はひっそりとしてきて、坂の下を通る人の足音もすくない。都会に住むとも思えないほどの静かさだ。気の早い次郎は出発の時を待ちかねて、住み慣れた家の周囲を一回りして帰って来たくらいだ。
「行ってまいります。」

茶の間の古い時計が九時を打つところに、私たちはその声を聞いた。植木坂の上には次郎

の荷物を積んだ車が先に動いて行つた。いつのまにか次郎も家の外の路地^{ろじ}を踏む靴^{くつ}の音をさせて、静かに私たちから離れて行つた。

青空文庫情報

底本：「嵐 他二編」岩波文庫、岩波書店

1956（昭和31）年3月26日第1刷発行

1969（昭和44）年9月16日第13刷改版発行

1974（昭和49）年12月20日第18刷発行

入力：紅邪鬼

校正：林幸雄

2001年1月15日公開

2005年11月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

嵐

島崎藤村

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>